

四 世の行く末

いなかひつそりと暮らす男が、動きの尋常でない世間の揺れにもまれて、柄にもなく無理をして今の世を見定めようとしている。その思案は結局のところ有識の人の口真似でしかないけれども、世を見極めるには基礎にある経済から考えずには済まされないとされているから、無理を重ねてさらに進まなければならぬ。

ヨーロッパの大航海時代が始まってから、今日のいわゆる地球経済は歩みを始めた。国境を超えて動く資本は循環範囲の拡大により活動を強め、しだいに世界中の社会が資本制を原理として動くようになった。その変遷の物語が、近世以来の世界史の中心にある。代表的な語り方がI・ウォーラー斯坦の世界システム論。それによれば、経済で中心的な地位を占める国の覇権は移動した。産業革命を始めた英国の今に至る盛衰は、典型的な事例なのである。共同体に生まれ育つ人間ではない資本は、どんな名を上げた長者よりも冷徹な超資本家である。最も利潤を上げやすい業種と運営法を選び、最も利潤の上がる場所に向かう。多額の資本を運用する人間つまり資本家は交代し、その業種を変え、資本の集中する中心地つまり経済的覇権国も移動することになる。こうして、資本制の世も幾世

代もの歴史を重ねてきた。

現在の経済状況を見てみよう。先進資本主義諸国から資本が、安い労働市場を求めて世界に向かっている。日本の中小企業が海外に進出してきているのは、その端的な表われである。先進諸国は、自国内で生産活動をして今までほど大きな利潤が得られないのだ。膨大な資本は行き場を求めてさまよう。そういう資本の流入に支えられて、中国を初めとする新興国の経済成長が起きている。ごく最近では、これまでの新興国よりさらに労賃の安い国々が注目を集める。たとえば、門戸を開いたミャンマーと各国の政府が外交関係を活発にしようとしているニュースは、資本がそこへ向かおうとしていることを伝えているのだ。現在勢いのある新興国の経済は変化をまぬがれないだろう。それはいたちごっこではないか。資本がより大きな利潤を上げることのできる場所を、平準化が進んでも地球上に見つけられるのか疑問が生じる。積極的なニュアンスをこめて使われるグローバリゼーションという言葉の奥に、暗闇がある。

多くの現象が、世界資本主義の行き詰りという帰結を暗示する。実際、先見的な人たちが、資本制は行き詰まっていると言う。天野祐吉さんもそう言う。世界の資本主義経済は、単に競争をしている国々の盛衰をひき起こしながら続いているだけではなく、その内実を

変化させているのである。

先進資本主義諸国の経済は、時代とともに質的变化を遂げてきた。製造業を投資の中心とする産業資本家が先頭の席を譲り、金融資本主義の時代になってから久しい。今では、金融工学などという言葉が生まれ、考え出せる限りのお金でお金を生み出す手法が開発されている。ヨーロッパの政権を担ったことのある政治家が、カジノ経済と呼んだのはまだ二十世紀のことだった。巨大になった世界市場で利益を集めて長者になる資本家がいるけれど、現在は人間よりも法人という抽象の方が主役に躍り出ている。肥大化した法人に国籍はない。あるいは多国籍と呼ばれている。そういう法人の支配人に過ぎない資本のしもべは、人間の生活を考慮することますます少ない。人々の思考はほとんどお金の増殖に限られていて、年金を預かって運用すると称する巨額の詐欺まで成立する。だが、金融会社や中央銀行がやっていることも、いなか者の眼には五歩と百歩ほどは変わらない。バブルをつくり出して桁違いの利益を上げたはずの大きな金融会社が、泡がはじけると、政府の資金で穴埋めしてもらったのを世界中が見た。

現在の資本制は公共の富を食いつぶして成り立つところまで来た、と見える。一九八〇年代から、利潤を上げにくくなった先進資本主義国で、資本は、公共事業や労働者保護の

制度に収益の余地を見出すようになった。さまざまな規則・規制は歴史的な事情があつて社会的な合意の下にできたものだが、資本にそれを目に見るゆとりが無くなつたのである。新自由主義と呼ばれる主張が、経済的なニッチを組みなおすために、政治を呼び出した。社会は徐々に、高度経済成長期とは違うものになつて、さまざまな問題が積み上がりつつある。最近あらわになつた格差の拡大はその一つ。資本制の困難が、社会の苦しみと成つて現われているのである。大きな社会もこのままではもたないだろう。その上、経済規模の拡大は地球の有限さという問題に直面している。生態環境を保ち資源を維持するというこれまでなかつた課題が、人間の経済活動に限界があることを教える。

ところで、歴史は、人間をその下で活動させる基本制度をさえも変化させずにはおかない。文明を打ち立ててできた古代社会も潰え、中世のヨーロッパや日本がつくり出した封建制も解体した。近世以来の基底的な制度で人間を規制すること最も抽象的な資本制も、歴史の劣化作用に耐えることはできないだろう。前回まで考えてきた世の動き、社会や政治の動揺は、結局、底にある現在の資本制のゆらぎから来ている。

資本制の行き詰まりを断言するウォーラスティンは、その先の社会の行方を心配する。去年も今年も年が改まる時に、彼のコメンタリーは、現在の資本制に代わつてどのような

体制が生まれるのかに注意を促した。二十年か四十年かのうちに、それが決まるだろう、と予言している。それを決定するのは、今起きている政治や社会のせめぎ合いの中で、どの勢力が主導権をにぎるにかかっている、苦しい立場に立たされている人々は連帯することによってしか前途を開けないだろう、と。

人は、世をただ悲観的に見ているはよく生きることができない。世界中で、多くの分野の有能な人たちが事態の打開に努めている。その努力が新たな経済と社会へつながるよう祈りたい。

二〇一三年夏